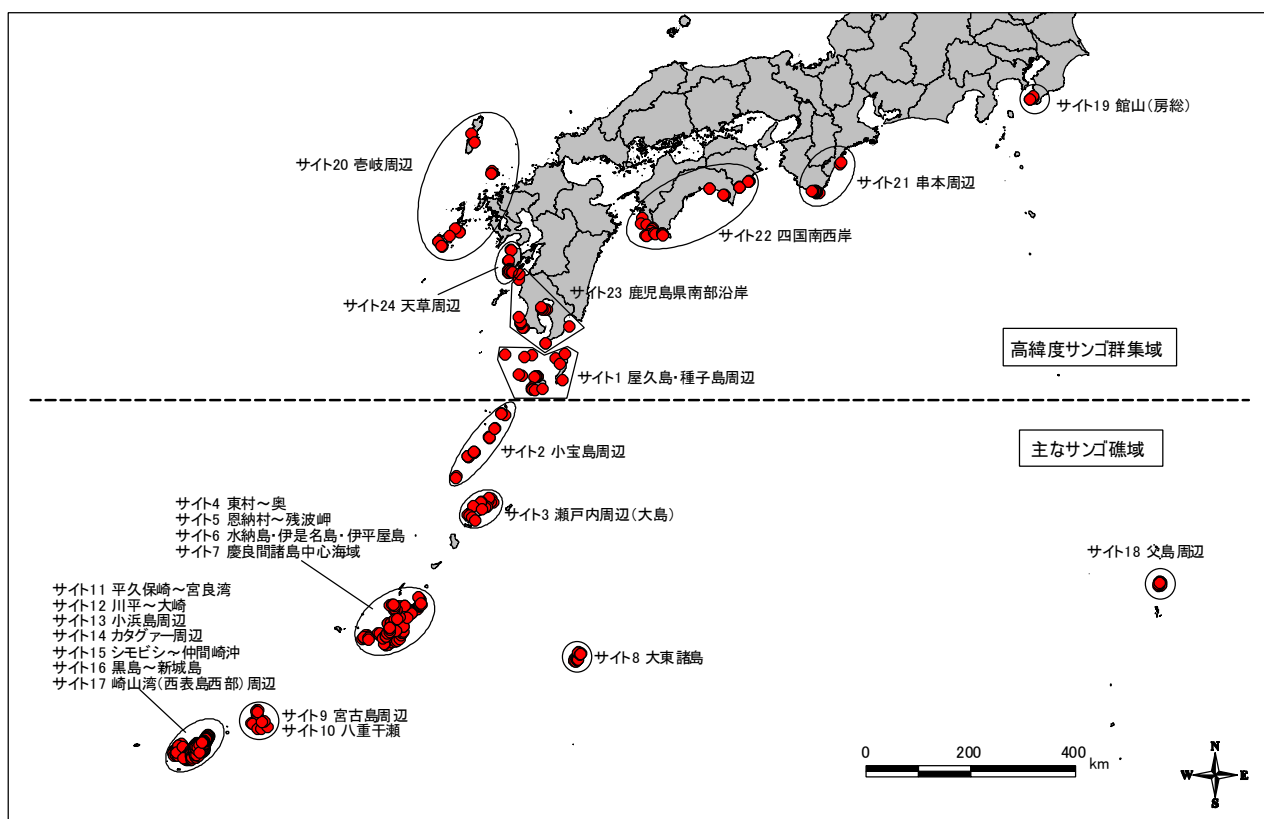


モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査

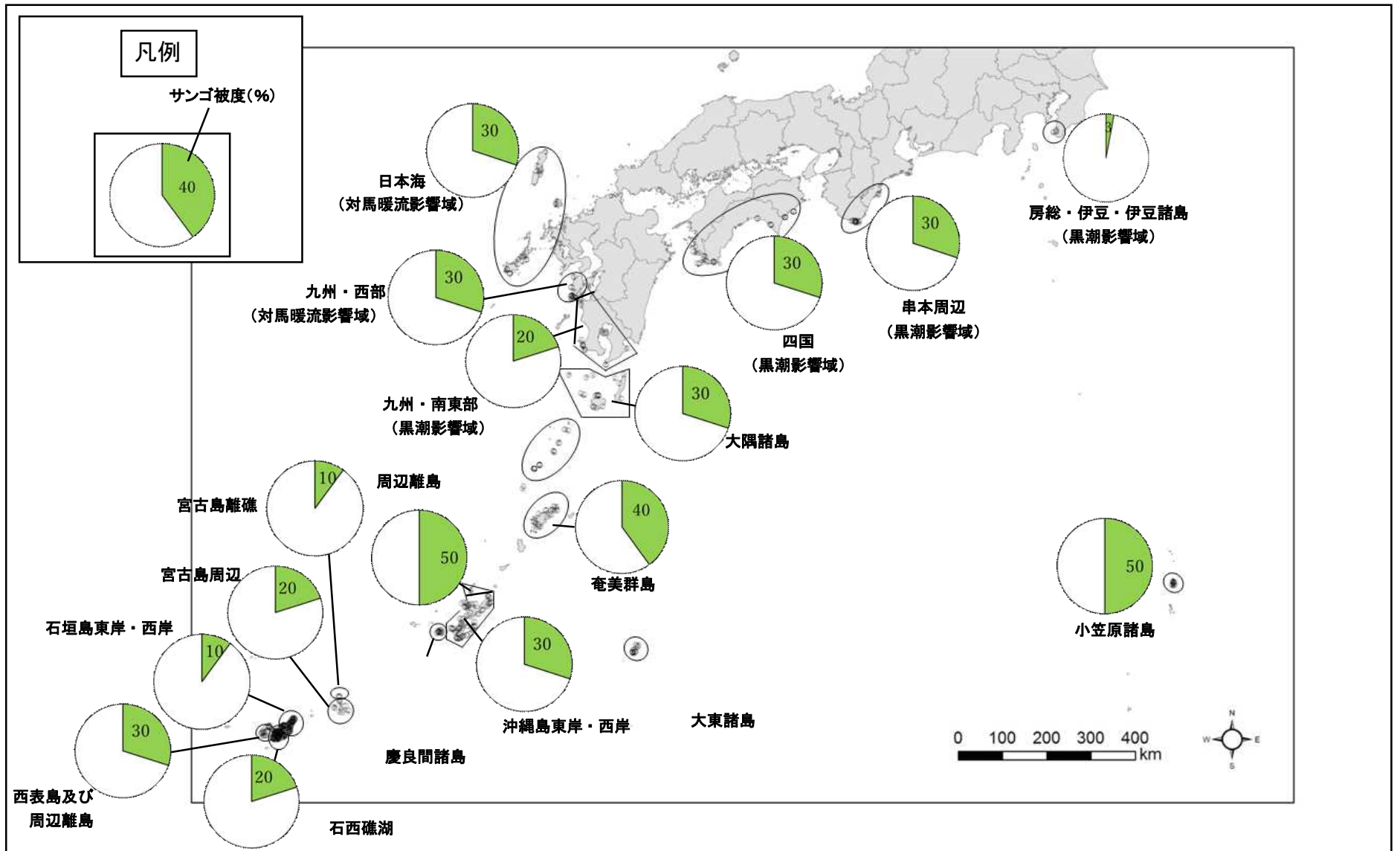
平成 29(2017)年度とりまとめ結果(概要)

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁の発達する「サンゴ礁域」とサンゴ群集が生育する「高緯度サンゴ群集域」に合計 24 の調査サイトがあり、毎年調査を行っています(小宝島周辺と大東諸島の 2 サイトは、遠隔地にあるため 5 年に 1 度実施します)。

ここでは、2017 年度の調査結果の概要をお知らせします。



モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査 サイト位置図



モニタリングサイト 1000 (サンゴ礁調査) における平成 29 (2017) 年度の各地の平均サンゴ被度 (%)

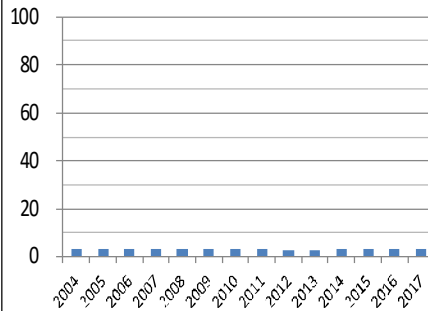
各サイト及び海域の概況

高緯度サンゴ群集域

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁を形成しない温帯域のサンゴ群集分布域のことを「高緯度サンゴ群集域」と呼び、屋久島とトカラ列島の間を境界にして、館山（サイト 19）から屋久島・種子島周辺（サイト 1）までのサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（%）です。

館山(サイト 19) 調査代表者:お茶の水女子大学・清本正人

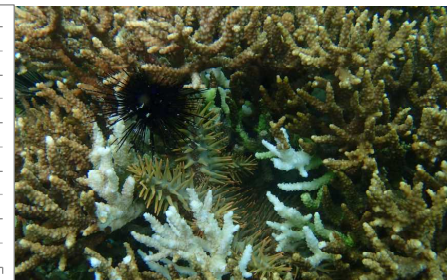
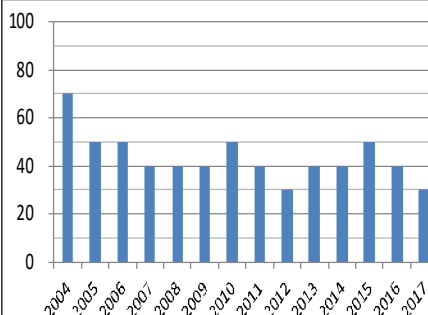
台風により一部消失したり、枝が折れた群体が散見されたが、全体での損傷は少なかった。アワサンゴ群集は例年通り現状維持しており、エンタクミドリイシ類も周辺にアラメ類がほとんど見られず良好な生育状況。



台風で破砕されたヒメエダミドリイシ

壱岐周辺(サイト 20) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

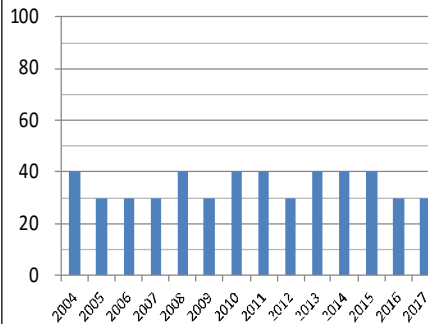
壱岐、対馬ではガンガゼがやや減少していた。福江島でもガンガゼによる食害が昨年より減少したが、南側の地点で直径 20cm のオニヒトデ 1 個体が観察された。シロレイシガイダマシによる食害が一部で見られた。



布浦調査地点で観察されたオニヒトデ

串本周辺(サイト 21) 調査代表者:串本海中公園センター・野村恵一

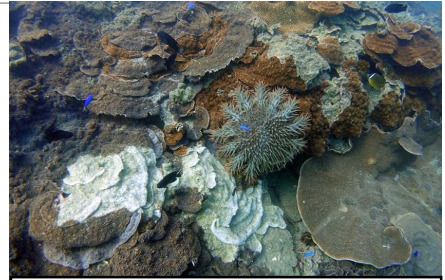
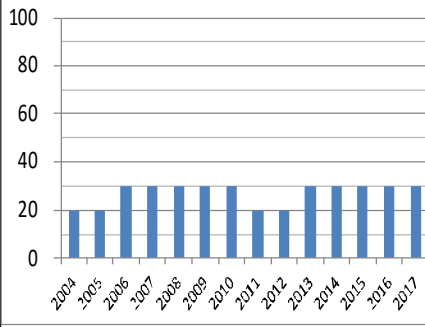
本年度は黒潮の離岸の影響もあり冬季の水温が低く、また大潮の干潮と寒波が重なったことから多くのサイトで低水温や干出による白化が目立った。中でも錆浦では全体の 40%もの群体が死滅した。



寒波による白化現象が見られたクシハダミドリイシ

四国南西岸(サイト 22) 調査代表者: 黒潮生物研究所・目崎拓真

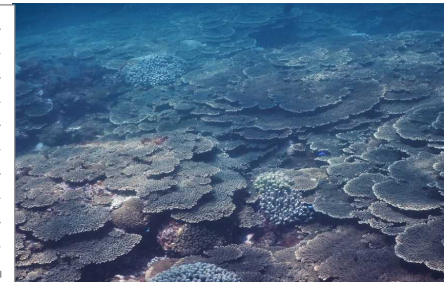
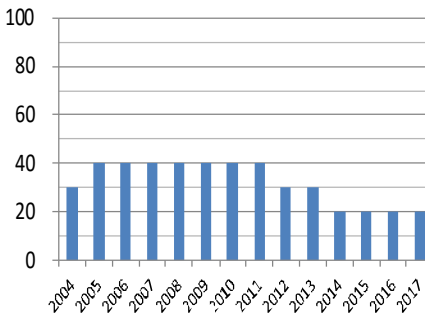
多くの地点で高水温による白化が見られたが、小規模であった。オニヒトデ観察数が大発生レベルの地点が1ヵ所(尻貝)あったが、その他は通常レベル。周辺ではオニヒトデ駆除数が増加しており、今後は注意が必要。



大発生レベルのオニヒトデ(大月町尻貝)

鹿児島県南部沿岸(サイト 23) 調査代表者: ダイビングサービス海案内・出羽慎一

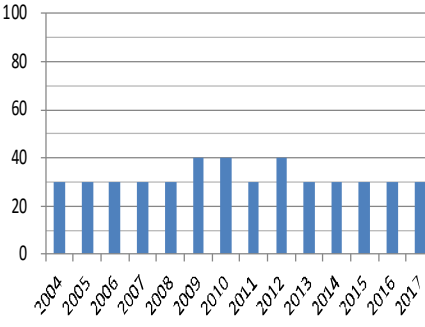
台風によるサンゴの破壊や転倒が見られたが、サンゴ被度への影響はほとんどなかった。また、オニヒトデもほとんど見られず、これまで被害を受けてきた地点では新規加入群体による今後の被度の回復が期待される。



佐多岬海域公園のミドリイシ類

天草周辺(サイト 24) 調査代表者: 野島哲

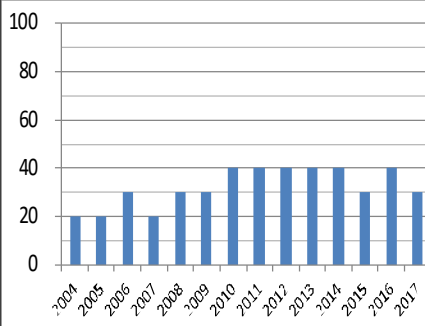
今年度は台風や白化現象がなくサンゴの生育には良好な年であったが、オニヒトデの食害を受けている地点があるため、成長分が相殺され平均サンゴ被度は昨年と変わらず20%であった。



大ヶ瀬調査地点のオニヒトデによる食害

屋久島・種子島周辺(サイト 1) 調査代表者: 屋久島海洋生物研究会・松本毅

高水温による白化が心配されたが、全体的に死亡率が低く、被度の減少には至らなかった。しかし台風による破壊が目立ち、サイトの平均サンゴ被度は昨年度の40%から30%に減少した。



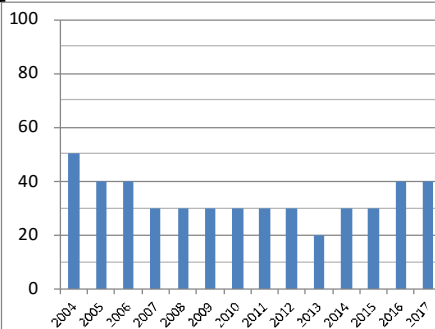
台風による破壊が見られた七瀬調査地点

主なサンゴ礁域

主なサンゴ礁域とは、サンゴ礁を形成する亜熱帯域を指し、モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、小宝島周辺（サイト 2）以南のサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（%）です。5年に1度モニタリングを行う遠隔地サイトのうち、大東諸島（サイト 8）は2016年度に、小宝島周辺（サイト 2）は2015年度に調査を実施しましたので、本年度は調査していません。

瀬戸内周辺(サイト 3) 調査代表者: ティダ企画有限会社・興克樹

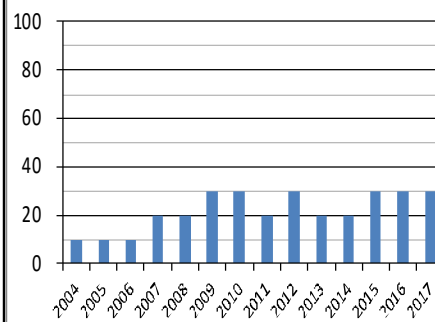
8月に礁池や大島海峡内でサンゴの白化現象が発生した。調査地に隣接する大浜礁池では約8割のサンゴが白化により死亡したが、その他の礁池では大規模な死亡は確認されなかった。平均被度は昨年と変わらず40%。



節田調査地点で白化した枝状ミドリイシ群体

沖縄島東岸・西岸(サイト 4~5) 調査代表者: 沖縄県環境科学センター・長田智史

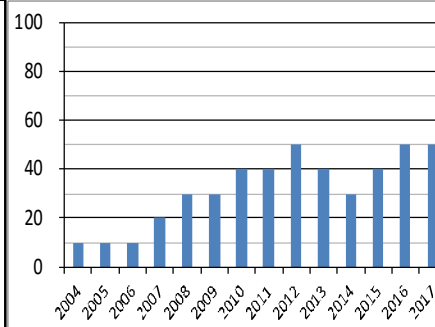
夏期高水温による白化現象が国頭村南部東岸を除いて沖縄島の東岸及び西岸で広く確認され、平均白化率は30%、死亡率は6%であった。真栄田岬や備瀬東では、観光客の踏みつけやフィンキックによる破壊も見られた。



一部に白化が見られる東浮原東調査地点

沖縄島周辺離島(サイト 6) 調査代表者: 沖縄県環境科学センター・長田智史

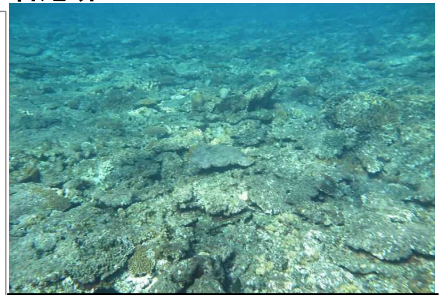
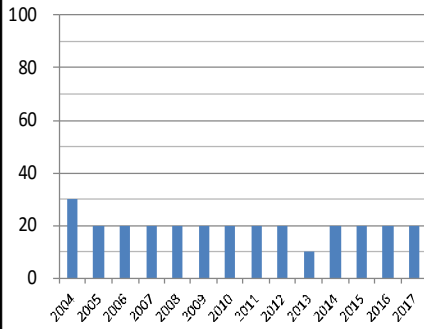
夏期高水温による白化現象は全地点で見られたが、昨年度と比較して割合は低かった。被度の減少した地点のうち、伊江島イシャラ原東は台風による波浪の影響も強かった。平均サンゴ被度は昨年度と変わらず40%。



白化の影響は限定的であった(伊江島)

慶良間諸島中心海域(サイト7) 調査代表者: 阿嘉島臨海研究所・岩尾研二

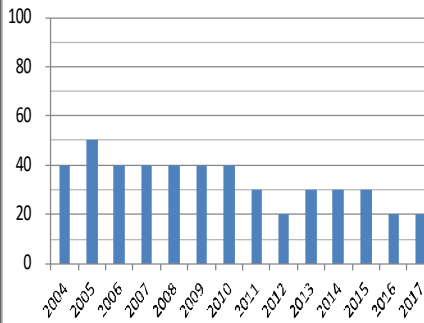
新規加入した小型サンゴの成長によりサンゴ被度が増加した地点もあるが、昨年の高水温による被度が低下した地点があるため、平均サンゴ被度は昨年度と変わらず 20%。しかし、今年度白化現象は見られなかった。



昨年の白化から回復しない地点(座間味ニタ)

宮古島周辺(サイト9)海域 調査代表者: 宮古島市役所・梶原健次

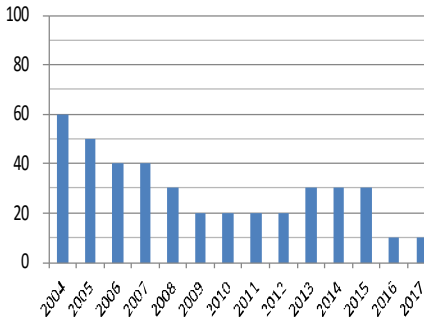
夏季高水温による白化及びそれにとまなう斃死は認められなかった。池間北ではオニヒトデが1個体確認されたが、食害はごく軽微でサンゴの被度変化には全く影響を及ぼさない程度であった。



加入もほとんどなく荒廃した狩俣西調査地点

宮古島離礁(サイト10)海域 調査代表者: 宮古島市役所・梶原健次

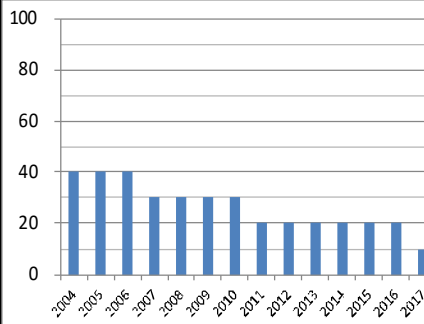
高水温による白化や死亡は確認されなかった。昨年度生残した卓状ミドリイシ群体のうちの約10%でホワイトシンドロームを発症しており、今後のサンゴ被度低下が懸念される。オニヒトデの食害は認められなかった。



カナマラで見られたホワイトシンドローム

石垣島周辺(サイト11、12)海域 調査代表者: (有)海游・吉田稔

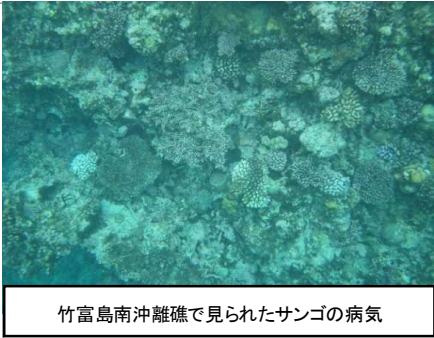
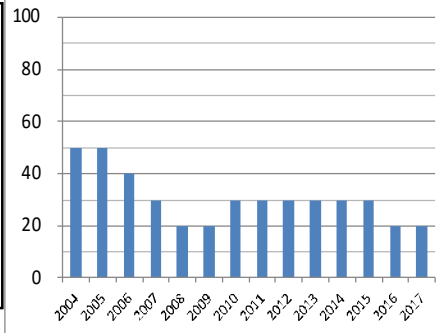
平均サンゴ被度は10%で、調査を開始した1998年以降最も低い値であった。一部で干出による白化現象が見られたが台風やオニヒトデの食害もなく、被度の低下は昨年度の大規模な白化後の死亡によると思われる。



冬季の干出により起こった白化現象

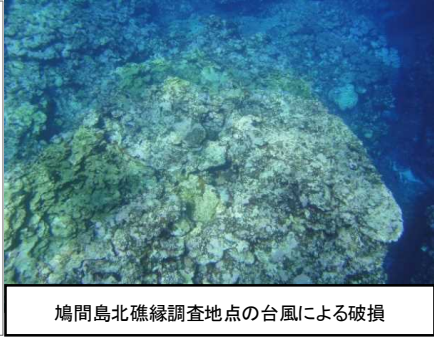
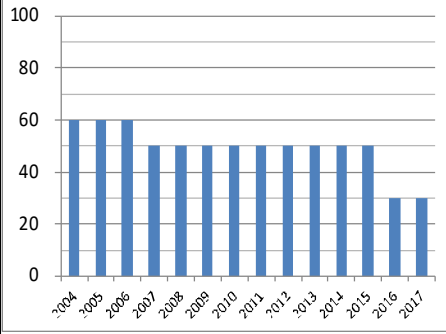
石西礁湖北部～南部海域(サイト13～16) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

平均白化率は82%(昨年96%)、死亡率は9%(昨年53%)であり、広域で高水温による白化現象が起こった。病気群体も多く、ホワイトシンドロームを確認した地点は昨年度より増加した。



西表島及び周辺離島海域(サイト17) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

平均白化率は78%、死亡率は7%であり、石西礁湖と同様に高水温による白化現象が観察された。また、台風による破損などの被害も見られた。平均サンゴ被度は昨年度と変わらず30%であった。



父島周辺(サイト18) 調査代表者:小笠原自然文化研究所・佐々木哲朗

一部に台風によるサンゴ群体の転倒や感染症被害が確認されたが、サイト全体としては高水温による白化現象やオニヒトデなど大きな攪乱はみられず、サイトの平均サンゴ被度は昨年の40%から50%に増加した。

